関市子ども見守りボランティアの誕生から5年

平成18年2月に関市子ども見守りボランティアが誕生し、その主旨に賛同された多くの方に登録していただきました。小学生の集団登校に同行していただける方や、危険箇所に立って交通指導をしていただける方もあり、「地域の子どもは地域で守る」という活動が徐々に広まっています。

市内での不審者情報もここ数年は減少傾向にあり、活動の成果であると考えていますが、子どもたちの安全を守る活動は今後も継続していく必要があります。

関市子ども見守りボランティアとは

「できるときに、できることを、できる場所で」活動するボランティアです。主な活動は、子どもたちの登下校時の同行、危険箇所での見守りです。そのほかにも、外出や農作業などを通学時間に合わせたり、普段のウオーキングコースを通学路に重ねたりすることで子どもたちを見守るといった活動も含みます。

仕事の都合などで活動ができない方でも、地域で子どもを見守るという主旨に賛同していただければ登録できますので、ご協力をお願いします。

子ども見守りボランティアに登録するには

生涯学習課、各地域教育事務所または地域の小・中学校へ申し出てください。登録の証として「見守りバッジ」をお送りします。子どもたちからの目印になりますので、見守り活動の際はバッジを着用してください。また、定期的に登下校への同行などをしていただける方には、見守りベストもお渡ししています。詳しくは、生涯学習課へお問い合わせください。

見守り団体紹介

田原子ども見守りボランティア

田原子ども見守りボランティアは、地元住民の皆さんが会員となり、田原地区で見守り活動を行っている団体です。子どもの安全を守る地道な活動が評価され、平成22年度に、学校安全ボランティア活動奨励賞（文部科学大臣表彰）と、岐阜県地域子ども支援賞の2つの賞を受賞されました。今回は団体の活動内容や見守り活動への想いなどについて、代表の神谷泰久さんにお聞きしました。

▲車が多く信号のない交差点では、児童が安全に渡れるように、毎朝旗を持って立ちます。

―団体について教えてください。

現在のメンバーは１８０人ほどで、民生児童委員や青少年健全育成、少年補導員、ＰＴＡなどの関係団体のほか、地元の方にも多く登録していただいています。平成19年４月には、警察庁から「子どもを守る地域安心安全ステーション」モデル地区に指定していただき、活動用のベストや交通安全旗などの物的支援もいただきました。また、関市から自主防犯団体にも委嘱していただき、青色回転灯装備車（青パト）も活用しています。

―団体として活動が始まったきっかけは、どんなことだったのでしょうか？

平成17年12月に、チャレンジウェルカムという地域行事の会議の後で、子どもの安全についての話題が出たことです。当時、子どもに対する凶悪事件が問題になっていて、「地元では起きていないが有志で集まって呼びかけよう」ということになりました。最初は１カ月ほどかけて自治会や老人会、ＰＴＡ、育成・補導関係者などに呼びかけようとしたのですが、「そんなとろいこと言っとるな」と一喝されました（笑）。ある団体の方が「うちは２日で連絡する」と言うと、ほかの皆さんもウチもウチもとなり、日曜日に話をして、次の水曜日には70人以上が集まりました。文書もなく口コミだけでしたが、保護者や先生、自治会、消防団と、とにかく大勢集まってもらえました。せっかくこれだけ集まったんだから一つの形、団体にしようということになり、規約をふれあいセンターの事務局長さんに、活動内容を校長先生にまとめていただきました。また、活動の際の目印になるようにと、警察のＯＢの方が警察署へ相談して腕章もいただけました。

▲田原子ども見守りボランティア代表の神谷泰久さん

―普段はどんな活動をされているんですか？

登下校時の危険箇所などの見守りと、青パトを使った地域内の巡回が主です。特に、登校時は通勤時間帯とも重なり、車の通行量が多い危険な場所もあるため、常時６カ所で交通指導を行っています。活動時には全員が活動用コートなどを着用していますが、ドライバーや地域の方に活動を印象付けることが大事だと考えています。下校時には野良仕事をやっている人が子どもたちを「おかえり」と言って迎えます。昔はみんなが普通にやっていたことです。

▲田原子ども見守りボランティアの青パト

―活動を続けることはとても大変だと思いますが、何か秘訣はありますか？

朝、街頭に立つことで子どもからエネルギーをもらえます。あなたも、歳取ってから立ってみるとわかりますよ（笑）。結構みんな、元気になっています。これは保証します。これからの高齢者には「生きようとする力」が大事になってくると思います。あとは、決して無理をしないこと。『できるときに、できることを、できる場所で』やることが、息の長い活動につながると思います。

―団体の課題などはありますか？

団体として底上げをしていかなければならなくなっています。メンバーが高齢化しているのが一番の問題です。高齢の方は、体力的に街頭に立つのが厳しくなっていきます。そういう意味で若い人、保護者の方にも参加してもらいたいのですが、その年代は仕事をしています。気持ちは出て行きたくても、経済的な問題や社会情勢もあり、ゆとりがなくなっています。でも、気持ちだけでもいいので、一歩前へ出てほしいと思います。

個人で立っている保護者の方もいます。小学生のお子さんがいる方ですが、ある日、フラッと来て立つようになり、それが何日か続いたので、「○○君、立つの？」と聞いたら「立ちます」と言われました。じゃあ、ということで登録してもらい、装備品も使ってもらいました。登録してほしいのは、ボランティア保険の対象になるからということもあります。

―今後の活動の方向性などを教えてください。

今回の受賞を契機にして、次のステップへ進みたいと思います。活動を型にはめる気はありませんが、組織を維持していくことは大切です。今は何も起こっていないですが、例えば子どもが行方不明になってしまったら、組織があればすぐに動くことができます。そんなことは起きないのが一番ですが、何かあったときに「とにかく行くから、一緒に行ける人は来てくれ」という指向性を地域に根付かせたいです。今でも、例えば街頭活動の人数が足りないとメンバーに連絡すれば、時間が空いている限りは出てきてくれるんです。

若い人にもまずは登録してほしいですね。登録して、子どもに「時間がなくてできないけど、何かあったらお父さんも出て行くよ」と伝えてあげるだけで、全然違うと思うんです。